

## 第十三編 アフロアラビアの遺跡、 ゲデイーを訪ねて

ゲデイーと言う地名はモンバサからマリンデイーに繋がる海岸通りのモンバサから65マイル、マリンデイーから10マイルの地点にある。モンバサから走って、ワタムと書かれた大きな看板を見て右に曲がるのだ。ワタムという地名もアラブ人が来て菓子くれたことに起因していると言う。ここにゲデイーというアラブ＝スワヒリ人の部落の遺跡がある。部落と言うよりも「独立の都市国家」だったろう。この遺跡は、1958年にナショナル ミュージアム トラストにくわわり、現在はケニア ミュージアム ソサイエティーの管理下にあり、プレヒストリック サイト&モニュメントのひとつだ。

発掘された見所は、グレートモスク、パレス、モスク群、住居であり、周りを壁が取り巻いていた形跡がある。元々の町の広さは、45エーカーあったとされる。モスクは15世紀のもの。オリジナルタウンは、恐らく堅固にできた部分だけで、貧しい人民層は泥と小枝の壁、椰子の葉で葺いた屋根、又は、萱葺きに住んでいたと思われる。町を9フィートの高さの壁が巡っており、3個以上の門があった。都市の構造では、上流階級は壁の中に住み、下層階級は壁の外に住んでいただろう。恐らく16世紀の後半に起こった騒乱で更に小さな範囲を囲む新しい壁が作られただろう。この壁はバリケードの性格を強く持っており、「THE DATED TOMB(日付けのある墓)」の近くの、残存している壁と一体となって防壁を構成していたのだろう。壁の材料は、珊瑚礁岩や赤土と珊瑚石灰である。

ゲデイーは、13世紀後半、又は14世紀初頭に築かれ、最盛期は15世紀の中頃とされる。そして17世紀の初頭に放棄されている。この町の設立の背景は、マリンデイーでおこったある市民論争が引き金となり、ある一団が移動してきたことによるという。

16世紀、又は17世紀初頭に、この都市国家を終焉させる何かが起こった。ある説では、モンバサからのマリンデイー征伐の派遣隊に破壊された可能性があるというのだ。

1529年4月のヌノ ダ クンハによるモンバサ破壊が、マリンデイーの人々の協力のもとになされたから、その仕返しにモンバサがマリンデイー征伐隊を送ったというのだ。しかし、もし、この説が正しいとすれば、この期間にはマリンデイーにポルトガルの司令部があり、彼らが記述を残さないはずがない。また、ある説は、ソマリアからの遊牧民ガラの南方進行をあげる。しかし、スワヒリ人が退避してもガラ人が住むというのが普通の形であり、都市が廃墟となる理由にはならないのが普通だ。19世紀にガラが衰退した時も、ゲデイーはよみがえらなかつた。他にも色々な説がある。例えば、余りにインド洋に

近接していた為、真水が塩水に汚染されたという説、疫病が発生したという説、東アフリカの貿易を独占しようとしたポルトガル人の攻撃があったという説、45メートルの井戸があったが枯渇し、近くのサバキ川も17世紀初頭には流れが変わったためという説もある。だが真実のところは誰にもわからないという。

この都市国家が何時できたかだが、「日付けの墓」が発掘されている。この墓にはムスレムカレンダー802AHと1399ADが平行して打ち込まれている。つまり13世紀後期に起こった都市国家だったのだ。

私は、『日付けの墓』の前に立って、しばし繁栄をしていた時代のゲデイーを想像してみた。ゲデイーの遺跡は、当時のマリンデイーやモンバサに規模的に匹敵し、その構造も同じであったと推定されている。今は失われたマリンデイーやモンバサの都市の原型を見ることができる。

((ゲデイーの町並みは、町原形を今に留めているといわれるラムなどに見られるように、人が行き来できるほどの幅の石畳の道が大きな区画を造り、その道の両端を溝がはしり、汚水を海までながしていただろう。その道を二輪の箱車を人が引き、また驢馬の群が両側に麻袋を垂らして重い荷物を背負って歩いていたらに違いない。中には驢馬に跨り我が物顔に闊歩する者もいただろう。インドや中国やベニスの商人たちも多数おり、夫々の民族衣装を身につけて歩き、黒いブイブイのイスラム女性達や丸いハットをつけたイスラム商人達が行き来していただろう。象牙、マングローブ、脂肪種子、穀物類、タカラガイ、亀の甲羅を輸出し、ダウ船をアラビアやインドに向け、誰もが欲しがる東洋の絹、香辛料、磁器を持ち帰ったのだ。街の区画は、更に家々の壁で仕切られ、夫々の家の壁が背中をあわせてひしめいていただろう。街角には井戸があり、共通の井戸の水が人々を潤していた。家は珊瑚礁から切り出した岩を土台にし、マングローブの木を柱に、壁はコンクリートと珊瑚の岩で丈夫に作られ、その上に白の石膏の漆喰を被せていた。床は涼しいタイルが張られ、窓を開けるとインド洋の涼風が入ってくる。海岸はマングローブで覆われている。家の中にはアラビア式の高足のベッドがあり、蚊帳が下がっている。食卓にはチャバティーが焼きたての香りを運んでいる。若い妻が夫に脇の開いた涼しいガーマットを着せている。足元は、木製のサンダルである。果物の籠には、バナナやナッツが入っている。ココナッツミルクの絞りたてが、作りたてのスパゲティーと共に運ばれてくる。取り立ての海の幸が食卓を賑わしている。結婚式の新郎新婦の手の甲には、インドでよく見た蔦の這ったような美しい模様が描かれている。腰に差す直刀の鞘にはアラビア風模様があり、小刀の先はくると曲がっている。宗教はイスラムである。戸を開けて外に出ると道路に面した門構えの玄関があり門扉を飾る豪華な彫刻が目につく。そこには誰でも座れるベンチ風の休み場があり、人々が腰をかけてお喋りを楽しんでいる。家の亭主が声を掛け中に招じ

入れる事もある。道路はまっすぐモスクに向かっている。見るとモスクの玉ねぎの形をしたドームの屋根が白の地に黄金の縁取りで旭日に輝いている。モスクは一つではない。町の中心にはパレスがある。町の繁栄のシンボルなのだ。一つの国家なのだ。アラビア風とインド風の影響を色濃くもったスワヒリ人の生活があった))

こんな想像をしながら、廃墟を案内人ゲルと共に歩いていくと都市国家の構造が浮き彫りになってくる。

((都市国家の政治と軍事の中心はパレスに住むスルタンであっただろう。スルタンは同時に裁判権をもち、市民の争いを収めていたに違いない。パレスは、今は廃墟とはいえ、往時の様子を偲ばせるに足る構造を残していた。そして宗教の中心はグレートモスクであり、歴代のスルタンを祭り信仰の中心をなしていたようだ。そして、貴族を中心とした上層階級の家がパレスとモスクを囲んで密集していたに違いない。裕福な商人の家も数多くあり、木彫の家具を作ったり、シルバーの装飾品を作ったり、珍しい産物や東洋の絹でできた衣類を店に並べていただろう。そして、その建物群を囲んで内壁があり、更に外壁がめぐっていた。一般大衆は、この壁の外側に住み、朝の開門で入ってきて野菜や穀物、取り立ての魚介類を売り、山羊や鶏を市場につないでいただろう。夕方の閉門前には外壁の門から戻っていったに違いない。軍事的な活動の時も、大土木工事の時も、外の民衆は駆り出され、兵隊や労働者として動員されただろう。))

しかし、何故ゲデイーは廃墟とならなければならなかったのだろうか。  
私は、考えながら、案内人ゲルに従って一つ一つ廃墟を廻って歩いた。

パレスの本殿には後ろに二組の裏部屋が付いており、その部屋の間には、戸の付いていない小部屋が一つある。これは、価値のあるものをしまっておく丈夫な構造の倉庫のような空間だった。その壁の上に付けられた小さな隠し扉から梯子を使って入るようになっていたという。その隠し部屋が、全て空っぽであったということは、ゲデイーが嵐によって捨てられたのではなく、『退避』によって放棄された証拠の一つとなる。

パレスは、コート、本殿、西側のウイングで構成される初期の建造物が、15世紀初頭に作られ、その世紀の後半に、拡張されて、別館が作られ、16世紀の終わりには、改築が試みられていたが、途中で都市が放棄されて、中断されたという。

グレートモスクのほかにも、多数のモスクがある。モスクには大抵井戸が付いている。雨水も、溜池に確保され、飲料水になったのだろう。

14個の大きな家屋が認識できる条件で発掘されている。全て一階造りである。ラムや

パテやオールドマリンデューやオールドモンバサと異なり、ゲデューは発展期で放棄された。屋根は石灰のコンクリートで、時には、床に四角いタイルを張ったりして、マングローブの木を四方の柱とした。最長のものは、8フィートで、これはかなりの太さを持ち、重い屋根を支えるには十分な強さが備わっていた。マングローブは容易に手に入った。土台や壁は、コンクリートと、時に珊瑚の欠片で重く安定させていた。切り出された珊瑚の塊は、玄関口の縁取りや階段に使われた。尖頭アーチは、ケニアの海岸部と北部タンザニアの特徴だという。これは恐らくインドから伝わったのだろう。15世紀の増大しつつあったインドとの接点を物語る証拠になる。

原型を留めている最古の家は、『タカラガイの家』(THE HOUSE OF THE COWRIES) と呼ばれている14世紀末建築の家だ。これに代表される原初形態は、前方に長狭なコート(中庭)、後尾に手洗い所のある長い部屋、その後第二の長い部屋と3個の小さな部屋(倉庫、寝室、台所)で構成されている。その後、このプランは真ん中の部屋を二つに分けて、一つの長い部屋と各二部屋をもつ二組のスイートの家になったという。推定するに、主人が二人の妻をもった為の変更であろう。もう一つの変更は、前方のコート(中庭)の形で、狭い矩形で、生活にのみ適した形から、幅広の矩形にして、商売や仕事場にも使えるようにしている。

『陶磁鉢の家』(THE HOUSE OF THE PORCELAIN BOWL) から、16世紀中庸の大きな青と白の鉢が一個発見され、蓮の房をつけた暗いオリーブグリーン色の15世紀の青磁の瓶の蓋が発見されている。鉢と瓶は、壁の中に固定されていたらしい。

『水槽の家』(THE HOUSE OF THE CISTERN) は、前方に四角いコート(中庭)があり、風呂場として使っただろう水槽の部屋のある大きな建物である。外部の壁には、沢山の落書きがありダウ船のスケッチもある。水槽の部屋は、昔のアラブ人の家では普通の形だが、ゲデューで発見された唯一のものだという。16世紀末に流行した『快適な生活』の場だった。

『仕切り壁の家』(THE HOUSE OF THE PANELLED WALLS) は、前部に二つの大きなコート(中庭)があり、二つの中部屋と二つの手洗い所の間に仕切り扉がある。

『長いコンジットのモスク』(THE MOSQUE OF THE LONG CONDUIT) から、16世紀中庸の中国製磁器の鉢とイスラムの多彩色の皿で恐らく16世紀初頭の作が発見されている。北側の壁の上にアラブの言葉で『全ての食べ物』(KULLU TAAN) という意味が何度も刻み込まれている。これは、コーランIII 93の冒頭の言葉であり、イスラムの戒律で、食べ物を論じているという。

『象牙の箱の家』(THE HOUSE OF THE IVORY BOX) と『鉄のランプの家』(THE HOUSE OF IRON LAMP) からは象牙の箱と鉄製のランプが発掘されている。

『ベネチアのビーズの家』(THE HOUSE OF THE VENETIAN BEAD) からは、小さな青磁の皿とベニス・ロセッタ ビーズを加えた貝殻製のネックレスが発見されている。ゲデイーがイタリアのベネチアや地中海地域とも交易をしていた証拠になる。

『中国の貨幣の家』(THE HOUSE OF CHINESE CASH) からは、中国貨幣が発見されており、ゲデイーが中国とも交易があったことを証拠付けている。

『長いコートの家』(THE HOUSE OF THE LONG COURT) や壁に一部分が一体化した『壁の上の家』(THE HOUSE ON THE WALL) がある。『二重のコートの家』(THE HOUSE OF THE DOUBLE COURT) や『ダウ船の家』(THE HOUSE OF THE DHOW) がある。そして『3つの側廊のモスク』(THE MOSQUE OF THE THREE AISLES) には、ゲデイー最大の井戸があったという。『鋏の家』(THE HOUSE OF THE SCISSORS) や『壁の上のモスク』(THE MOSQUE ON THE WALL) や『西壁の家』(THE HOUSE OF THE WEST WALL) がある。そして、内側の壁の『南の門』(THE SOUTH GATE) に続く。『北の門』(THE NORTH GATE) から外壁がはじまる。更に外回りには、幅広だが浅い溝がめぐらされている。外壁は、矢来を立てたらしい大きな穴が幾つか残る。

マリンデイーより北上するとラムがある。ラムはその都市の原型を今に伝えているとされ、世界遺産に指定されたと聞く。ゲデイーがラムと同じだとすれば上流階級の台所にはナッツミルクの搾り器、スパゲティー製造機、炭を使った鉄製の湯沸かし器、穀物の粉碎機などがあったはずだ。

ゲデイーの生活は、『植民地風でかつ快適な生活』(COLONIAL AND COMFORTABLE) と表現されていた。しかし、その快適さが崩された理由は何だったのだろうか。案内人ゲルは、明快に『井戸水が枯渇したか、井戸水に塩分が多くなり飲料水に不適切となったため』と断定していた。

スワヒリ人というのは、アラビア人の入植者の子孫で黒人と混血した人たち(アフアラビアン) 又は黒人から見てアラビア人との混血(アラブアフリカン) ともいえる海岸部に住んでいた人たちのことだ。この東アフリカの海岸では、約1000年の間に、通商、殖民、そしてイスラムの膨張を通じて、スワヒリ人の都市国家がいくつも成長し、特徴ある文化(アフアラビア文化) を生んできた。その都市国家はお互いに激しい競争をして

いたらしい。都市は、独立を主張し周囲を高い壁が廻っていたのが特徴の一つだ。ゲデイ  
ーは、その都市の原形を今に伝える遺跡の一つだ。

アラビア人の足跡を尋ねると、モンバサの運転手は、「全てだ。数百年前のケニアには灌  
木以外何もなかった。アラブ人はココナッツやカシュナッツをケニアに持ってきて植えた。  
ブルーガム（ Chewインガムの原料）やバナナやカサバもアラブ人が持ってきた。その後  
ポルトガル人がアンガス系の大型牛を欧州から持ってきたり、イギリス人が青いバナナや  
茶をインドから持ってきたが、アラブの功績には適わない。私はアラビア人を尊敬してい  
る」との答えが返ってきた。「今はアラビア人は何処にいるんだね」と尋ねると、彼は「こ  
の辺一体にいる。混血しているから分かりにくいんだ」という。なるほど、それがアフロ  
＝アラビアンなのかと思った。

参考文献：

GED I (Gedi historical monument & Museum, Malindi)

LAMU (Map and Guide to the Archipelago, the Island, and the Town)

THE CATS OF LAMU (by Jack Couffer)